

2026年 9 月のてがたんは当日受付にて実施しました。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。観察記録のレポートを作成いたしましたので、ご覧ください。

次回のとがたんは、10 月 10 日（土）で、テーマは「「毒」と「薬」は使いよう」です。ぜひご参加ください。市民スタッフの皆さま、次回の下見は 10 月 4 日（日）です。

9 月の観察コースと内容

- コース：鳥の博物館→ じゃぶじゃぶ池北側の土手→ 手賀沼遊歩道→ 釣り堀東側→ 親水
広場駐車場東側→ 鳥の博物館2階市民交流ルーム
- 観察日時／天気：2026年9月12日（土）10:00～12:00／曇り
- 参加人数：4名（大人3名、小学生1名）
- 市民スタッフ：7名（石原直子、伊東茂子、北村章子、弘實さと子、古澤紀元、
松田由美子、湯瀬一栄）
- 鳥博職員： 1名（岩本二郎）

— 観察した生き物の記録 —

下見で見られたものも含む。

【鳥類】 カイツブリ科：カイツブリ／ハト科：キジバト／ウ科：カワウ／サギ科：コサギ／タカ科：サシバ／カワセミ
科：カワセミ／キツツキ科：コゲラ／カラス科：ハシボソガラス、ハシブトガラス／シジュウカラ科：シジュウカラ／
ツバメ科：ツバメ／ヒヨドリ科：ヒヨドリ／ムクドリ科：ムクドリ／スズメ科：スズメ／セキレイ科：ハクセキレイ
家禽や外来種：ドバト（ハト科）、ガビチョウ（ソウシチョウ科）

【昆虫】 カメムシ目：チュウゴクアミガサハゴロモ、キマダラカメムシ、アブラゼミ（声）、ツクツクボウシ（声）／
バッタ目：シバズ（声）、マダラスズ（声）、キンヒバリ（声）、クサヒバリ（声）、ツツレサセコオロギ（声）、
オカメコオロギ（声）、エンマコオロギ／チョウ目：チャドクガ幼虫、モンクロシャチホコ幼虫、ヤマトシジミ、ウラ
ナミシジミ、イチモンジセセリ、アオスジアゲハ、ナミアゲハ、ジャコウアゲハ幼虫

【クモ類】 カニグモ科：ハナグモ／アシナガグモ科：アシナガグモ／ジョロウグモ科：ジョロウグモ

【軟体動物】 ナメクジ科：ナメクジ／ウラナメクジ科：チャコウラナメクジ

【樹の花】 ミソハギ科：サルスベリ／マメ科：ハギ属の一種／アオイ科：ムクゲ

【草の花】 ヤマノイモ科：ヒメドコロ／ツユクサ科：ツユクサ／カヤツリグサ科：ヤマイ／イネ科：メヒシバ、オヒシバ、
シマスズメノヒエ、コツブキンエノコロ、エノコログサ／ブドウ科：ヤブカラシ／アカバナ科：ユウゲショウ／マメ科：
ツルマメ、クズ、ムラサキツメクサ、シロツメクサ／カタバミ科：オッタチカタバミ／アオイ科：モミジアオイ／タデ
科：イシミカワ／ヒユ科：ヒナタイノコヅチ／アカネ科：ヘクソカズラ／ヒルガオ科：ヒルガオ／ナス科：ワルナスビ／
キク科：オオブタクサ、アメリカタカサブロウ、ブタナ、オニノゲシ

2026年9月の観察アルバム



今回のテーマは「てがたんオノマトペ」でした。オノマトペとは擬態語、擬音語などのことで、自然を観察しながら、参加者が感じたオノマトペを確認し、言葉の面白さを楽しみました。当日の朝は雨だったおかげで、普段はあまり見られない生きものが見られました。ナメクジのほか、芝生にはこれまでてがたんコースでは見たことがないほど多くのキノコが生えていました。



今月の案内人

石原 直子さん 北村 章子さん



①博物館外壁で蛹になったジャコウアゲハ。



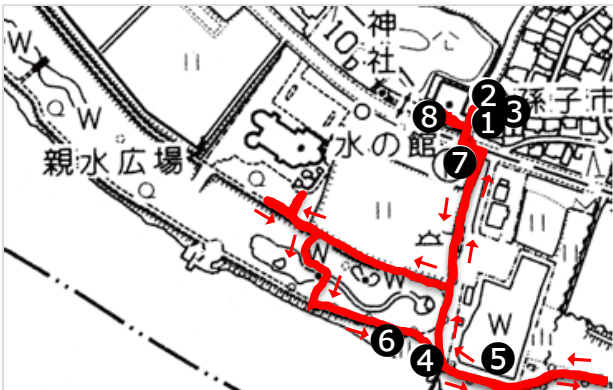
②雨に濡れたサクラの幹をはっていたナメクジ。



③背中に盛り上がりのあるチャコウラナメクジ。



④群れていたヨコヅナサシガメの幼虫。



歩いたルートと観察した生き物



⑤釣り堀で様子をうかがうコサギ。



⑥サザンカに群れていたチャドクガの幼虫。



⑦サクラを食べるモンクロシャチホコの幼虫。



⑧電線にとまるシジュウカラ。

今月の鳥 巣を離れた後の雛たち

ほとんどの鳥では、雛たちは巣を離れた後、親鳥について餌の採り方や捕食者を避ける方法を学習します。これは、いわば「見習い期間」のようなものですが、巣立ち雛は上手に飛べなかったり、捕食者を危険なものとして識別する能力が低いため、天敵にとっては捕食しやすい餌となります。そこで雛たちは、親鳥の警戒声に反応して、隠れたり、じっと動かなかったりします。親鳥はもう十分に成長したと分かると、独り立ちを促します。しかし、独立した直後はまだうまく餌を採れないこともあり、餓死する個体も多くいます。捕食や餌の問題に対しては、単独ではなく集団で行動することで対処する様子がみられ、ハシブトガラスでは若い個体が集まって群れを作ります。一方、ツバメの集団ねぐらでは、若い個体と成鳥が一緒になって夜を過ごします。



ハシボソガラスの親鳥（中央）と巣立ち雛（左右）